

変わる環境、消える生き物

静岡市内中学校

櫻井 さん

「前はここに、ザリガニが沢山いたのに。」

母は、コンクリートで固められた側溝を見てそう言った。生き物の気配もしないこの側溝にザリガニがいたのかと、私は驚いた。

かつてのその側溝の壁は、小ささまざまな石で固められていた。泥底で、ザリガニが穴を掘って身を隠した。壁の石の隙間によくザリガニがいたのだと、母は言う。隠れるには好都合だったのだろう。

私は今年の夏休み、ザリガニがいる側溝や、小さな川などを探した。やはり、コンクリート化された場所には、ザリガニはいなかった。一方、ザリガニがいる場所は、少なかったがいくつか見つげられた。それらは全て、底が泥で覆われ、流れの緩やかな場所だった。

この側溝では、コンクリートによる護岸が、ザリガニの生活を大きく変えてしまったのだろう。コンクリート張りになり、身を隠せる場所がなくなる。緩やかだった水の流れも、速くなった。こうして、ザリガニが住める環境は、失われたのだ。

今まで側溝には蓋がなく、転落による怪我が多発していたらしい。転落防止のためにも、コンクリートなどで蓋を作ることは、必要だっ

たのだろう。しかし、そこら中の側溝をコンクリート化する必要はあったのだろうか。もしそこに住んでいる生き物のことを考えていたら、ザリガニが住めるような側溝も、残っていたかもしれない。

コンクリート化による影響を受けたのは、ザリガニだけではない。同じように住みかを失ったり、天敵やエサを失った生き物たちだ。

自然の中で、生き物たちは互いが繋がりがあって生きてきた。里山などで、人間の生活に適応して生きているものもある。しかし、人間が生き物たちの生活環境を完全に変わらしてしまえば、彼らはそれに対応できず、姿を消してしまう。

では、生き物がいなくなることで、人間にどのような影響があるのだろうか。まず、食料とする生き物がなくなるなどの影響がある。しかし、私が一番に感じたのは、幼少期に生き物に触れる機会が減る、ということだ。

人は幼少期、沢山の生き物とふれあう。母も弟と二人で、よくザリガニを捕って遊んだらしい。生き物にふれあった体験の一つ一つが、子どもの心の成長に繋がっていると、私は思う。子どもたちは生き物を見て、きれいだな、とか、かっこいいな、と感じる。動物園に行けば世界中の生き物を見ることができ、一番子どもたちが心を動かされるのは、自然の中で力強く生きる生き物たちの姿だろう。蝉の羽化や、虫を捕食するカマキリなどだ。

今、そんな自然も、生き物たちも、失われつつある。人間の手によって急速に変化した環境に、追いつけない生き物たちが沢山いる。私たちはこの状況を見直し、生き物たちとの共存について、考えていかなくてはいけないのだと思う。

しかし、生き物を単体で守っても意味がない。例えば、ある魚を保護し、別の場所で飼育したとする。しかし、その魚がいなくなることで、他の生き物に影響はないのだろうか。自然は全て繋がりがあってい
るのだから、何か一つが欠ければ、全体のバランスが崩れてしまうこと
とだって考えられるだろう。自然そのものを守らなければ、意味がな
いのだ。

そのために、ビオトープを作る、ということはとても効果的だと思
う。生き物たちが住めるような自然を、もう一度作り直す。そこで、
自然界のバランスができあがれば、生き物たちは以前のように暮らせ
るだろうと私は思う。

私たち一人一人にできることは、まず自然を知ることだと思う。実
際にふれあって、自然の力強さを体感する。これから守っていくべき
ものを、もう一度みつめ直すことが大切だ。

人間は自分たちの暮らしのために、環境を変えていった。地球温暖
化やゴミ問題は、人間の行動が大きな原因であり、多くの生き物たち
が被害を受けている。痩せ細ったホッキョクグマや、プラスチックを

飲み込んだ魚を見て、被害の大きさに気づくのだ。

もしも、自分たちの行動による、生き物たちへの影響を考えていた
ら。コンクリート張りの側溝で、姿を消すザリガニのことを想像でき
ていたら。今の地球の環境は、もう少し変わっていただろうと思う。

生き物たちの自然が、人間たちの社会に飲み込まれつつある今、生
き物の多様性を守るために、自分たちの行動について考えなければな
らないだろう。